

来切断されていた再生産論と信用論を結びつける結接点を明らかにしたものである。上の定式の最後の式がしめすように、マクロ的にみた信用創造係数は再生産の部門構成に依存する。そして、この部門構成の動態的研究は、最近のわが国における再生産表式分析の中心テーマの1つであって、これらの研究とより具体化された川合教授の信用創造論が成功裏に結びつくことができれば、循環的実現の理論、ひいては、循環的価格変動論にも明るい展望がひらけてくるかもしれない。わたくしには川合教授のこの信用創造係数論が最も示唆的であった。

[2] 以上でのべたように、わたくしは本書の主要論点には基本的に同意するのであるが、若干の論点には疑問がある。ここでは、そのうち、預金論についてだけ指摘しておきたい。

銀行信用の本質を「貸付—兌換」とみる川合教授は、兌換請求に何時でも応じうるために銀行は預金を集めるとされた。問題はこの預金の性格であるが、教授の信用創造係数モデルにおいては、IICに相当する現金を銀行は持っていなければならない。そして、これは教授の説明からも明らかな通り、一般流通に必要な現金の一定部分であり、流通手段としての現金である。これを銀行は預金として保有しなければならない。しかもこれは、個人貯蓄ゼロのもとで存在しなければならぬ預金である。ケインズ流の純計分析では消去されてしまうところの、いわば再生産構造的貯蓄概念がここにはある。またこれは、宇野派の預金=遊休資金とも異質であることはいうまでもない。

ところが、教授は商業信用論においては、宇野派の遊休資金の相互融通論を肯定されているかの如くである。例えば、教授は、商業信用の連鎖が結成されたときにも、「発端の資本家が負担した流通期間中の追加資金だけは全体としての負担として残る」と考え、「発端の資本家だけが負う追加資金の負担は、競争による価格の変動によって、資本家全体に平準化される」(88-9)といわれる。この主張自体わたくしには理解できないのであるが、もっと大きな問題点は、銀行信用に対する預金の役割を論ずるときのマクロ的視点がここで見失われていることである。上述のような主張は、個別資本の立場で、しかもその特定の行動様式を仮定しなりかぎり主張できないものだからである。教授が銀行信用における信用創造を論じたと同じマクロの視点にたてば、例えば、一般流通完了時点を支払期限と想定すれば、中間流通全体が商業信用で行なわれるとしても、同一事態を結果する。信用創造が商業流通と一般流通の範疇的区別を基礎にす

る以上、商業流通の担い手が商業信用であろうと銀行信用であろうと、事態には何ら本質的变化がないことは、川合教授の立論から当然帰結されることではあるまいか。それゆえに、遊休資金論に対する関係が商業信用論と銀行信用論ではくいちがうかにみえる点に疑問が残るのである。

このことは、ひいては、商業信用と銀行信用の関連をどのように考えるべきかという論点に関係してくる。もはや詳論する余裕はないが、わたくしは、商業信用は信用貨幣に対する需要を意味し、銀行はそれを銀行券で割引くという形で、それに対する供給を行なっているのではないかと考えている。そして、銀行貸付が預金の設定という形態で行なわれるようになって、その背後に、いわば省略された形で、商業手形の割引行為が存在していると考えれば、信用関係を全体として商業流通を基礎にして統一的に理解できるのではないかと思う。この点については、わたくし自身に理解のたりないところがあるかもしれない。川合教授の御教示がえられれば幸いである。

【高須賀義博】

富沢賢治

『唯物史観と労働運動』

ミネルヴァ書房 1974.10 386 ページ

本書は、労働運動論を唯物史観の立場から理論的に基礎づけることを課題とし、唯物史観と労働運動論との関連を、「労働の社会化」という概念を基軸に追求した第1部、資本による労働の社会化の過程と労働運動を論じた第2部、帝国主義段階における労働運動の特質を、主にレーニンに即して追求した第3部からなる。

本書のメリットの1つは、従来スローガンのように言及されることはあっても、深く追求されることのなかった「生産の社会化」、「労働の社会化」、「生産手段の社会化」という概念を、マルクスやレーニンの文献を広く渉猟して克明に追求した点にあると思われるので、この書評では、この問題に関係のある第1部と第2部とを主に取りあげることにしたい。

ところで本書のタイトルにもある「唯物史観」という表現は、著者によると誤りではないにしても、マルクスの立場を正しく表現するものではないという。すべての思想を唯物論と観念論とに2分したのは、エンゲルスで

あってマルクスではない。マルクスは、観念論とともに唯物論も批判して、むしろ「実践の問題をもっとも重要視」する立場にたったのであり、「マルクスが自己の思想を唯物論として規定した適切な箇所を彼自身の文献のなかからみいだすのは困難」(傍点原文)だとされる。

しかしマルクスは、『資本論』第2版の「後記」のなかで、「私が私の方法の唯物論的基礎を論じている『経済学批判』の私の序文」(傍点引用者)という表現を使っていることを、1例として指摘しておきたい。マルクスが実践的立場を重視したことに異論はない。しかしマルクスが観念論とともに唯物論もこえたと言われる主要な典拠は、『経済学哲学草稿』などの初期マルクスの文献である。マルクスの初期と後期とをほぼ同列に置いて論じているのが、本書の1つの特徴であり、また問題の1つはそこにあると思う。

私は、本書のようにマルクスの初期と後期との間に基本的な差異を認めない見方には疑問をもつ。その理由は、『聖家族』におけるマルクスのブルードンに対する高い評価から『哲学の貧困』以後の厳しい批判への変化は、『所有とは何か』から『貧困の哲学』へのブルードンの変質の結果というよりは、むしろマルクスの側の発展の結果だと考えるからである。

私は初期マルクスの疎外論の限界を次の点にみている。第1に、方法上の限界として、宗教も国家も貨幣も資本も、おしなべて非人間的な事象が共通の「疎外」というカテゴリーに還元される。その結果「固有の対象の固有の論理」(マルクス)が見失われ、特殊の一般への還元となり、具体性における歴史的社会的認識が妨げられる。そのことと関連して、第2に、疎外論は政治の理論たりえない。たとえば1848年の革命に際して、マルクスは、ドイツにおける統一近代国家の樹立を革命の課題として掲げたが、近代国家は疎外態であるから、疎外論からはこうした課題設定はありえない筈である。総じて疎外論は、一定の歴史的時点に何を為すべきかを指示できない。そうである限り、疎外論はかえって実践的でなくなるし、従って主体的でなくなるのである。真の主体性・実践性は、徹底した客観主義(唯物論)に裏打ちされなければならない。

本書は、疎外論を基礎として、むしろその結果として、労働運動の「もっとも基本的な原理」を「人間をして真の人間存在たらしめるための人間による意識的運動」と規定する。この規定では、労働運動という「固有の対象の固有の論理」は把握されておらず、社会主義運動との相異も明らかでない。また「労働運動の基本目標」は、

「労働そのものの否定ではなく、外的強制労働として現われる労働の歴史的形態を揚棄して、そのような労働を本来の人間的な意味をもった労働に転化させること」にあるとされる。さきの規定よりは具体性があるが、しかし社会主義運動との相異は依然として明らかでなく、また一定の時代のある労働運動をどう評価するかというような問題にアプローチしうる理論としては、この規定は一般的に過ぎるのではないか。むしろ労働運動とは、労働者階級が自己の階級としての利益を擁護し貫徹する運動と規定した方がよくはないだろうか。

しかし本書のねらいはより基礎的な理論、体制論のレベルにある。その際著者が最も力を注がれている中心テーマが、資本主義体制の矛盾の1つの極をなし、かつ労働運動成立・発展の基盤をなすと考えられる「生産の社会化」の概念の解明にある。

まず「社会化」の概念に関して、VergesellschaftungとSozialisierungとの相異が、前者は「1つの社会構成体の全体」に関係し、後者は部分社会(工場や地域など)に関係する点にあるとされる。私自身は、W.S. Semjenow: *Kapitalismus und Klassen*, 1972. が、「自然的分化」(年齢・性・人種の差異)に対して「ゲゼルシャフトリッヒな分化」(経済・職業・政治・民族・イデオロギー・心理・階級などにおける差別)を対置し、更に後者を、「固有な意味でゾツィアールな差別」と「ゾツィアールでないゲゼルシャフトリッヒな差別」とに分けているのを知っている。この場合「固有な意味でゾツィアールな差別」とは、「生産関係システムにおけるさまざまな地位」に関係するとされる。つまり「自然的」に対して「ゲゼルシャフトリッヒ」であり、後者のうち生産関係に関連する部分が「ゾツィアール」である。一方が全体概念、他方は部分概念で、「生産の社会化」は全体概念だとする著者の説に異論はない。

著者は、「生産の社会化」の主体的側面が「労働の社会化」、客体的側面が「生産手段の社会化」だとし、「労働の社会化」を「心髄」とみなす。けだし「労働の社会化」は、疎外なき社会における社会的人間を可能にするともみなされるからである。

では「労働の社会化」とは何か。著者は、「数多くの分散的な生産過程が1つの社会的生産過程に融合すること」というレーニンの規定を引用され、この融合過程における「労働のあり方の変化」だとされる。しかしレーニンのこの規定は自明ではない。それは、(1) 独立の分散した小企業に代って大規模な工場が成立することを意味するのか、それとも(2) 現物経済に代って商品関係

の網の目が全経済を蔽うことを指すのか、あるいは (3) 社会的分業の発展により生産諸部門が相互に不可欠に依存しあうようになることなのか。

レーニンは、(1)を労働の社会化の「過程の1小部分」とみなしている。しかし(2)は、レーニンの説明から判断して労働の社会化とはみなしえないと私は考える。(3)は不完全にはあれ、労働の社会化を反映している。レーニンは、「分散的小商品生産者の制度」のもとでの「各人は自分のために」の原則の働く「市場変動の無政府性」の世界に対して、「各人はすべての人のために、そしてすべての人は各人のために働く」制度を対置しているが、これが「労働の社会化」の意味であり、資本主義がそれをもたらすのは、独立の産業部門の数の増大つまり社会的分業の進展と、更に専門化した各産業部門における資本家の数の減少つまり競争による生産の集中とによってであって、その結果、企業の1つでも作業を停止すると、社会全体の生産機能が著しく混乱するように、「全生産が1つの社会的生産過程に融合」するのである。

著者は、労働の社会化の「基本的形態」を商品生産関係にみているが、しかし分散した小商品生産者の世界は、「私的労働」Privatarbeit(『資本論』)の世界であり、労働の社会化をもたらす主体は資本以外にはないと私は考える。

他方「生産手段の社会化」とは何か。著者によると、「個々の生産者によって用いられている生産手段の集団的使用への転化、生産手段の社会的分散状態から社会的な集積・集中状態への転化、そしてついには生産手段の全社会的規模での共同的使用への転化」と規定される。この規定は、商品生産関係を「労働の社会化」の「基本的形態」とする著者自身の見解と相容れない。商品生産者の世界は、生産手段の社会的分散状態を意味するからである。また「生産手段の全社会的規模での共同的使用」は、文脈から判断すると、社会主義社会で実現するものと考えられているから、資本主義のもとでは工場内での生産手段の「集団的使用」に帰着するが、これはレーニンのいう「過程の1小部分」であり、社会化の部分概念となり、全体概念としての「生産手段の社会化」が資本主義では成立しなくなる。

生産手段が少数の資本家のもとに集中すると同時に、その生産手段たとえば原料としての石油が欠乏すると、社会全体の生産機能が麻痺するという事態や、またたとえば電力が停まると全生産が停止するという事態が示すように、生産手段が社会全体の再生産にとって瞬時も必要不可欠な社会的な物件に転化すること、これが「生産

手段の社会化」の意味であり、この事態はまさに資本主義が実現するものと私は考える。

「資本による労働の社会化の過程」を扱った第2部第4章が、全体概念ではなく部分概念としての「社会化」に帰着している事も気になる点である。また「帝国主義段階における労働の社会化」を論じた第3部第7章で、「ブルジョワジーによる労働運動の体制化という意味での「労働の社会化」という問題」が提起されているが、労働運動の「体制化」と労働の社会化とは問題の次元を異に思う。

なお「労働関係」という用語は、マルクス本来の「労働組織」という用語で置きかえた方がよいと思う。

【古賀英三郎】

望月清司

『マルクス歴史理論の研究』

岩波書店 1973.8 618 ページ

I 近年、『経済学批判要綱』研究を中心としてマルクス研究が新たな高まりを示してきたことは周知のところである。本書はこれらの研究動向と密接な関連に立ちつつ、上記の動向における重要かつ困難な領域でもあるマルクスに独自の市民社会論を「歴史理論」として再構成することを試みたものである。本書の課題は次のところに置かれている。「もっぱらマルクスの歴史観、歴史認識、歴史理論を、…マルクス自身の論理とその発展に直接にとりくみ、ときほぐし、再構成すること」(p.2)、そして、この「発展」のプロセスをマルクスの「経済学研究のその都度の達成と対比しつつ、まず市民社会分析の歴史理論形成として、さらには資本主義分析の歴史理論への成熟の過程を追認することを通じて、その方向と射程を明らかにすること」(p.6)。このような課題設定のもとに、本書は「疎外」(哲学)と「分業」(経済学)(p.9)とを二大視座として重層的に構成されている。以下、本書の構成と内容を簡単に見ておくこととしよう。

II まず、上記の課題設定を含む序「マルクス歴史理論と『唯物史観』」が置かれ、次いで、初期マルクスにおける「市民社会」観の変遷過程を「ヘーゲル的『市民社会』」から「スミスの『市民社会』」への認識の深化ならびに視点の移動としてとらえた第1章「マルクスにおける市民社会認識の形成」が置かれる。第2章「疎外と社会的交通」は、マルクスに独自の市民社会論の生成を、